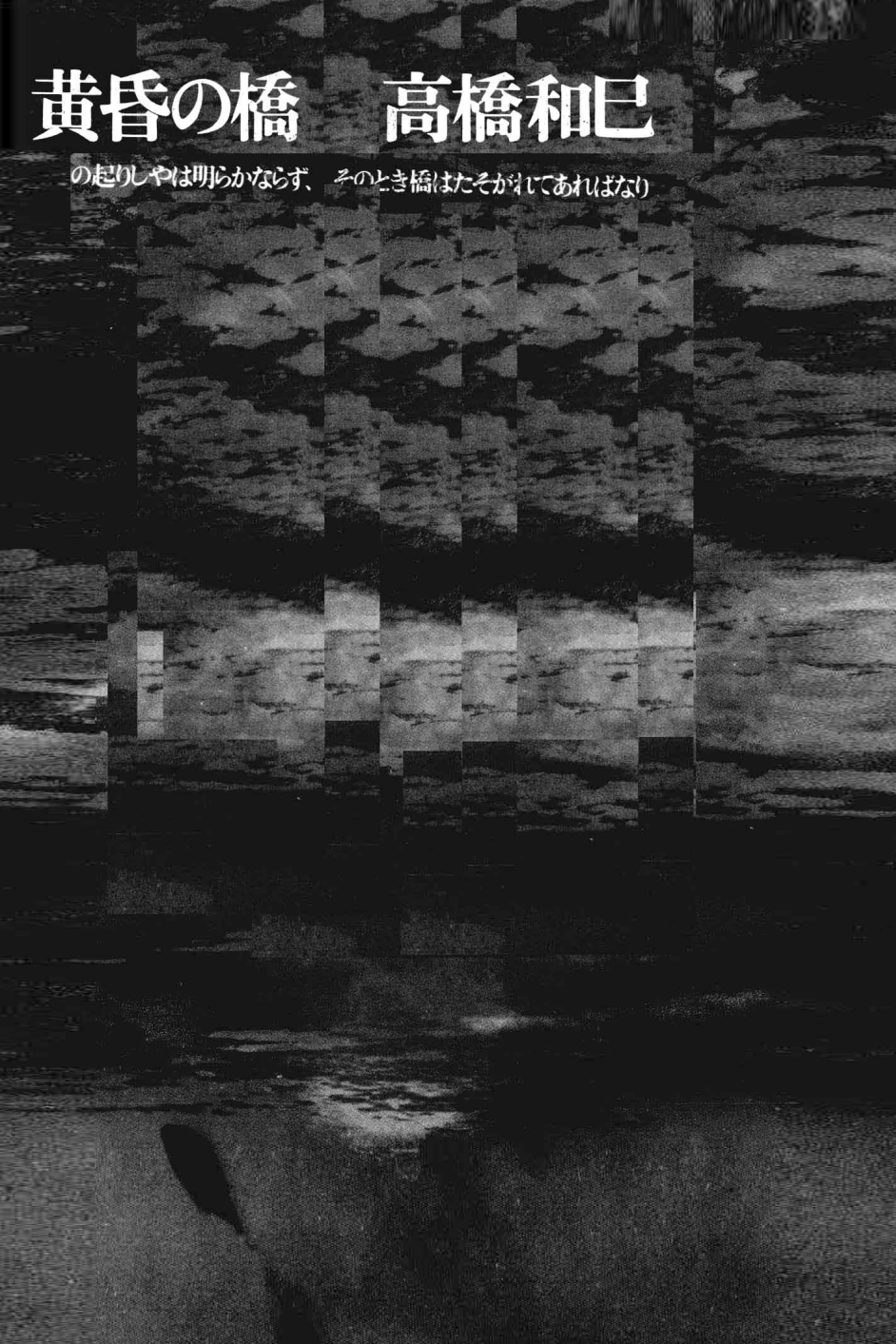


黄昏の橋 高橋和巳

何事の起りしやは明らかならず、
そのとき橋はたそがれてあればなり

黄昏の橋 高橋和巳

の起りしやは明らかならず、そのとき橋はたそがれてあればなり



黄 昏 の 橋

昭和四十六年六月二十六日初版第一刷発行

定価 六〇〇円

著 者 高 橋 和 巳

発行者 竹之内 静 雄

発行所 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町二ノ八

電話東京(五七)七六五一(代表)

振替東京四一四二二三

郵便番号一〇一―一九一

装幀者 中島かほる

印刷 厚徳社
製本 鈴木製本

© 1971, K. Takahashi

(分類) 0093 (製品) 80070 (出版社) 4604

黄
昏
の
橋

そゝ何事の起りしやは明らかならず、
そのとき橋はたそがれてあればなり

第一章

一

道路からやや奥まった玄関の潜戸から、鬘石しきいしづたいに、軒のたれこめた勝手口の障子紙が淡く輝いているのがみえた。胸をつきさすように平和にみえた燈火は、しかし点滅することもなく、しばらくたたずむうちに、つるべ落しの落日のように色褪せていった。いや、それは燈火自体が輝きを失ったのではなく、たたずんでいる彼の内部に風が吹き抜けたにすぎなかった。

勝手口に向って左側は隣家と区切る低いコンクリート塀、右は今も活用されぬ離れと腰生垣が鬘石に沿っている。やがて崩れるのをまつ老朽建築にふさわしく蒼い旻天あまざらの影が屋根の上におちていた。鬘石が濡れて光るのも、おそらく散水のためではないだろう。後手に潜戸を閉めて、時枝ときえだ正和は、さるすべりの樹のかたわら、外燈のない薄闇と、生垣のくちなしの葉に半ばおおわれた郵便箱を覗きこんだ。

——誰からも何もきてはいなかった。いや、むやみと音信のあるうはずのない郵便箱を往き返りに覗きこむのは単なる悪癖にすぎず、実際に来信を期待してする動作ではなかった。

「司書の講習がありましたね、おそくなりました」

携えていた書類カバンを下駄箱の端において、彼は控えの間の窓寄りにすえられた安楽椅子に腰かけていた婦人に言った。発散する醜臭くんしゅうをはばかって息をひそめた時枝の胸は、無意味な深酒に気味わ

るく高鳴った。そのとき二年間みなれた控えの間の丸窓が、奇妙に滑稽に思われたのは何故だったろうか。

「またお酒をおめしですね」くつろいだ時には四国弁をつかう下宿の主婦が丁寧に言った。

「いや」

誰を待っているのか、編物も持たず控えの間にいる婦人の素朴な顔立ちからぼろりと一つの表情が落ちた。街路を歩んでいたときには感じられなかった秋の風が、前栽に面した円形の窓から吹きこんできていた。道路ひとつ距てた家並みの彼方は、古い神社の境内になっていて、風は揺落する樹木の香りがした。そのうえ、戦災を免がれた古都の家にだけある黴臭い畳のにおいがまざる。

「外はもう寒いでしょうに」

「ええ、川辺りは、すこし」と彼は言った。

たしかに彼が油をうっていた川堤の旗亭^{きてい}では赤に白字の小旗が、窓から瞰下せる中洲の葦よりもはげしく吹きざらしに翻っていた。月給取りや日傭が酔って囃す流行歌は、亡国の歌のように寒々しいかと思ふ。

「晩御飯は食べてきなすった？」

素早くすり抜けて自室に逃れようとした時枝にむけて婦人は言った。彼は置き忘れたカバンをぼんやりと振りかえった。忘れ物と彼とを見較べる婦人の目は、彼をいらさらさせる憐愍の瞳だった。そのとき、隣室の電話台のわきに立ち止り、しばらくの間、彼らのいる控えの間を窺う人影のあるのを時枝は意識した。この家の、二人いる娘のうちの一人、おそらくは姉の方の、不運な出戻り娘に違いない。人影は障子越しに寸時たらずで逡巡した。その影が揺れてみえたのは、しかし時枝が酔って

横様に揺れていたからだだろう。「ふん、いい気なもんね。毎晩、酔っぱらって帰ってきて……」人影はわざとらしい足音を残して奥へ去った。

「ちよっと待ってくださいよ」彼は額を拳で軽く打ちながら言った。

「どうかしなすった？」矢野駒は言った。

「いや、つまりですね」

ときおり、彼は人に説明できない奇妙な幻覚におそわれる。神経質に空拭きされた玄関の扉、さすがにそれだけは磨くわけにもいかぬ古びた矢野章生なる標札を見たときなど、それがたしかに彼の下宿であるにもかかわらず、どうしても帰る家を間違ったという気がする。ネクタイを弛め、安心して入ってゆくと、まったく見知らぬ人間が恐ろしい面相をして出てきそうな気がする。いや、たとえ、相手が満面に微笑を浮べて出迎えても、ひよつと振り返ると、目も鼻もないのっぺらぼうが笑っているかもしれない。爬虫類の肌、焰のような二枚舌、不気味な怪物たちが中世の幻想画のように踊り狂う。背後を振り返ってはならぬと命令されたオルフェウスの恐怖を、彼はそのとき理解する。

「何を考えてなさる？」婦人が椅子の肘当てを小刻みに打った。

「いや、不規則な食事をとるもんだから、さっきから考えてるんだけど、晩御飯を食べたんだったかどうか忘れてしまってますね」時枝は苦笑した。「今日は土曜日でしたね。だから博物館の仕事は昼まで、……確か一時すぎには外に出てですね。それから司書資格の講習会があつて……おかしいですか？」

博物館の学芸員と図書館の司書は取得すべき科目の単位が違っている。彼はすでに学芸員の資格をもち現に博物館に勤めているのだからそれはいくぶん余計なことだった。だが上司に薦められ自分も

ある下心があつて集中講義のかたちで行われる司書の講習をうけていた。むろん書籍やカードの分類法は博物館の巻物や器物の整理にもすぐ役立ちをする。しかしその講習会のあるなしにかかわらず、彼の帰宅の時間は、いつものことながらおそすぎた。しかも下宿の婦人が要求しているわけでもない弁明をくだくだしくつらねながら、悪酔いした彼の頭にはもはやその講習の内容も、それから解放されてのちの自分の行為にも確信がもてないのだった。

「お食がんなさい。折角、用意してあつたんだから」矢野駒は立ちあがつた。彼女は時枝の肩に手をおき、その肩越しに柱時計を眺めてから、台所へ立った。「お部屋でより、ここで食べてくださるでしょう。面倒だから」

仕方なく酔漢は「はあ」と答えた。そのときパン屋の広告の刻みこまれた柱時計の音が大きく甦つた。てれかくしに頭を搔きながら、彼は、心温い饗応、宿主の日頃の寛大な待遇を、不当にも胸苦しく感ずるいじけたエゴイズムと闘わねばならなかつた。いつごろから鬱積したのか、いまにも爆発しそうな褐色の憤怒が胸のあたりいっばいに詰っていた。いや、彼の憤怒には、そもそも、いつ、何故に、というはつきりした理由はなく、しかも爆発させようにもできぬ微温的な職場と、噴出させようにも機会のない密室を往還しているうちに、すでにその明瞭な輪郭すら失っていた。時折り、風の吹く夜など、砂丘の砂のように飛び散り、松の梢を蹴って消えたと思える時もある。しかし目醒めれば、生活の波音とともにそれは蘇る。まるで彼につき従う能のない影法師のように。

日々は張合いなく憂鬱にすぎ、その影法師だけが輪郭はぼやけながらも、全く消失することなく彼につきまとう。初めは確かに自己以外のものに憤っていたはずだった。だが、日々の職務にも忠実にはなれず、つまらぬ失敗を重ねているうちに、いつしかその影は彼自身を譴責するものに変つてしま

ったのだ。

彼は大学卒業後、すでに数種の職業を転々としていたが、現在の職場での孤立も責任は残念ながら彼の側にあった。上役の信頼を失い、同僚にも気味わるがられるようになったきつかけは、昨年秋に起った。ある週日、彼は大和の古寺へ円山応挙の掛軸の借款交渉に出張を命じられた。出発のさいは憂鬱どころか、ほとんど足が宙に浮いていたと思う。どこで観察したのか、瀕死の原爆被災者のように手首を折った異様にリアリスティックな亡霊の絵だった。軸の幅、添え地の絹質から、紙魚の数まで精密に記録し、借用書を手渡し、急遽、その成果を伝えようとした彼は、帰りの駅であわて、反対側の列車に飛び乗ってしまったのだ。失策の名にすらあたいたくない瑣細な過失にすぎない。彼もまた、一種浪漫的な気分为目的から遠ざかってゆく蜜柑畑の風景を眺めていた。ところが、翌日にも、さらに三日、四日、五日たっても、彼は博物館の館長室に報告にあらわれなかった。上役の心配、そして彼自身の意図に反して、南畿のある河畔の木賃宿で、田舎女中を相手に、金銭のつづくかぎり大酒を呑んでいたのである。どうしてそんなことになったのか。釈明を求められても、彼にも答えられなかった。ただなんとなくそうなってしまったのだ。

乗り違えた列車に一時間ばかりぼんやり坐っていて、引きかえすべく降り立った駅のまぢかに素晴らしく透明な川が流れていた。敢ていえば風景の魅惑、その川の水の碧さがいけなかったのだ。彼は川辺に立って暫く釣人の竿さばきを見物し、そして樹々や山肌の輪郭が浮き彫りになる夕暮れの道を川に沿って遡った。その川沿いの道にもバスは通っていたが、それには乗らなかつた。そして日の暮れるところに、ほんの二、三軒、山に抱擁されるように建っている鉱泉の宿があつた。

交渉は失敗したわけではない。むしろ意外にスムーズに進捗したのだから、電話でも報告してお

けばよかったのだ。事実夕食に酒を添え、やがて際限なく盃を重ねながらも、時折り彼はそう思つてはいたのだ。出張先きで風邪をひいてしまったと言う方便でもいい。ともかく連絡さえすれば全き信用の失墜という最悪の事態はふせげたはずなのだ。だが彼は何らの手を打たず、馬鹿笑いをし、あるいは不意に涙ぐんだりして茫然と酔いつづけていたのだ。

むろんそのことで、ただちに退職を勧告されたというわけではない。展覧会そのものには何の支障もなかったのだから。しかし彼は自分の犯した行為を何とも説明できぬまま、もの見事に上役の信用を失い、いつしか同僚にも心理的に疎外される位置に立った。

そして実は、説明しようのない失敗は、それがはじめてではなかった。

たとえば数年前、姉の房子が結婚した時もそうだった。彼は姉を愛しており、姉の結婚には何故か心はずまないものを覚えながらも、そうすれば姉が喜ぶだろうとわざわざ友人に頼んでモーニングを借り、早々と汽車の切符も買ってあった。早い目に駅までゆき、早すぎた時間を食堂でつぶしながらふと彼は幼少年期、物資が乏しくその絶対的な窮乏のゆえに家族の關係までがぎすぎすした時代、自分を献身的にかばってくれた姉のことを想い起していた。ふっと回想の世界にはまりこんだというだけのことだったのだ。だが、彼が現実に戻ったとき、予約してあった座席指定の列車はとくに通過してしまつていた。それからの彼の数時間は悲憤だった。タクシーを飛ばして伊丹の飛行場にかけてくれたのだが、日曜で大安という日の吉さのために空席はない。あるいはキャンセルがあるかもしれぬという係員の言葉を頼りに彼は次の便を苛々しながら待った。やっと飛行機に乗ったと思うと、しかし機内放送で名を呼ばれて予約者が駆けつけたからと席を奪われた。その時は、水中翼船が神戸から高松まで開通したばかりだった頃で、そのことを思い出して、再びタクシーで神戸まで彼は馳せつけ

た。姉の結婚式の時間は刻々に迫り、彼は満員の水中翼船の中で人目もはばからずモーニングに着かえ、高松の埠頭に着くやいなや韋駄天走りに駆け出した。埠頭から駆けて五分ばかりの会場だったが、彼が駆け込んだとき、すでに宣誓式は済み、披露宴に入っていて、途中、着がえのために姉は媒酌人につきそわれて絨毯敷きの廊下をむこうから歩いてくるところだった。顔面汗だらけになり、お祝の言葉もはげず肩で息をしている彼に、姉の方から「正和！」と呼びかけ、そして姉は白くお白いを塗った頬に大粒の涙を流した。

その時はともかくも顔はみせたのだから、父母や親類縁者の怒りは買わずにすんだ。しかしなぜ一列車はやく切符を買っておかなかったのか、なぜ一日早く休暇をとらなかつたのか。あびせられる人の質問には答えようがなかつた。そして結局は滑稽なものとなつてしまったモーニング姿をもてあまし、彼はついに祝いの感情を共有できぬままに、泥酔してしまつたのだ。

この世には、なぜか彼が参加しそこねた法則がある。その法則だけが正義ではないだろうし、彼の方もそれを完全に了承しているわけではないにしろ、声を荒だてて対抗するほどの観念の富もみずからにない。だから、そうした人々の感情を逆撫でにするようなことはすまいと常々、心がけてもいた。人にはそれぞれ口外しえない苦渋というものがある。それは社会の正義や秩序一般などとは交換しえないにせよ、しえない故にその個人的な苦渋を威丈高に主張はできない。彼にもまた些かの苦しみが、訂正のできない過去の時間の闇のうちに埋めきれずすぶつてはいたのだが、しかしそれを癒す場として、すすんで懲のはえたような博物館の世界を選んだのであつてみれば、仕事がつまらなくて怠けたとは言えなかつた。いや、事実怠けたのではなく、どうでもいいと思つていたのでない。ただ、何となく失策をおかしてしまふのだ。

「まあ、いいさ」時枝は癖になった私語をつぶやき、食事の間へおもむいた。

炊事場つづきの奥の風呂場から、家の子供らの華々しく騒ぐ声がかきこえてきた。彼がときおりその復習や予習の手助けをしてやる中学生と小学校に通う兄弟である。上二人が女、下二人が男の子で、兄の方はいま高校受験に忙しく、そして二人とも手におえない甘ったれだった。

「先刻、お家から長距離電話がありましたね。電話口へは徳子が出ただけだ」

質素な衿あわせの襟をあわせながら、矢野駒はガス焔炉を覗きこんで言った。ともかく、不思議に落ち着いた態度で生活し、話す、婦人の顔にはそのときも微笑が浮べられていた。その平和な表情の裏にどうした経験が秘められているのか、時枝には理解できなかった。金銭欲、名誉欲、加うるにこれも難解ななにかの欲望にとらわれ、ほとんど帰宅もせずあちこち奔走している主人矢野章生から音信があるのかないのか、それも解らない。たぶん政治ゴロといわれるものの一員なのだろう。この古都の繁華街にあった出店も人手にわたり、正業が呉服商であったことは、家族の着ている、古びながらも趣味のいい衣裳にわずかに名残りを留めるにすぎない。矢野駒はしかしなにごともなかったように微笑していた。すでに二年を経た素人下宿住いであるから、盆や祭りには、共に馳走に団欒し、観劇をたのしんだこともある。昔話の二三は、そうした機会にきいてはいたが、やはり微笑の内容はわからなかった。

「近々、いちど家へは帰ろうとは思ってたんですけど。ただ……」

茶瓶は軽快な物音を立って沸騰しはじめていた。

「お家の方、昼間には博物館の方へもお電話をなすって見たんだそうですよ」矢野駒は言った。「それに夕刻には、うちからもあちこちお探してみたんですよ。でも、あなたは一体どこに居るのか

のわからない人だから」

「ははは」と彼は無意味に笑った。

「笑いごとじゃありませんよ」

一語一語区切るように矢野駒は言った。

採光の点からはまことに前近代的な台所の間は、下宿人用の飯台も片付けられていて、素漠としていた。便利なようで事實はあまり活用されない魔法瓶の前に、座蒲団が一山につまれている。その上に三毛猫が寝ていた。

「お母ちゃん、そっち水出したら、お風呂の方がでやへんで」風呂場から弟の方の甘え声が出た。

「よし、よし」と婦人は声をかけた。

「お母さん、お風呂熱い、熱い」蒸気のためか、不必要なまでに湿りのある兄の方の声が近づいた。

「徳子、徳子、お風呂の加減をみてやって」

奥へ向って駒は声をかけた。だがこの家の出戻り娘の返事はなかった。「しよのない人ね、ほんとに」と言いながら、しかし婦人の目は、深酒の酔いに揺れている下宿人の方に向けられていた。いくらか、こみいった話があるふうだった。そして次に何かがあるという予想が、時枝を不機嫌にした。なにかの好意からである忠告ならば、聴かずにおこうと彼は思った。道徳や善意などとは縁がないと傲慢に思いこんでいるわけではない。第一、そう思うにしろ、胃の粘膜を自家消化するような素寒貧で駄目なのだ。ある戯曲のヒロインが発狂して、「私はいままで、人様の慈悲によって生きてきました」と述懐するのを聞いたとき、不覚にも彼は舌を噛んで嗚咽したぐらいいだ。今まで触れそこね、これからも錯誤しつづけるだろう、天界の散華のしたたりのように、暗い客席で彼は奇妙に寒々とした

幻をみた。もつとも、それは翌日には忘れ、なにに胸を衝かれたのか理解できず、元のひねくれ者に彼は戻った。昨夜の感傷は今日の虚妄というわけだ。

「時枝さん」と矢野駒は改めて呼びかけた。

「家からの電話、なんでした？」彼は不規則に動悸する胸に手をあててみた。蠟のように扁平な胸だった。手編みのチョッキの上からでも充分肋骨の並びが感触できる。望むなら、すぐさま自己憐愍の感慨にふけりうる無能な肉体である。

二階を下宿人の一人が歩くかすかな足音が聞えた。簾ととりかえられてまだ間のない銀箔の襖の山水が震えてみえた。下宿人の弁当日が記入された月曆は、事実、吹きこむ秋風に揺れていた。冬になればいたるところ隙間風すまみかぜのもれる襖と柱とのずれが、家全体の傾きを物語っている。

「水をあげましょうか」と矢野駒は言った。

「何かあったんですか、今日」

おそらくもう何年も化粧をしていない矢野駒のひそめられた眉毛のあたりは、快楽を断念した諦念の滑らかさで微妙に光っていた。更年期の肥満は、あらそいがたく軀の節々にあらわれていたけれど、肉体は着物にはなく、その諦念に覆われ、一つの回想のように輪郭がぼやけていた。

「明日の朝にしましょうか、酔ってられるんだから」

「何度、禁酒の誓いをたてたかな」

「そうしましょうね、明日に」

「お袋、私の酒のこと言っとったでしょう」

「いいえ」

時枝は沈黙をおそれて、外からみれば美と伝統の殿堂のようにみえるだろう博物館にもある、錯綜した人間関係の憂鬱について語った。しかしそれは語りかける本人の態度が曖昧であつてみれば、人に理解されようもない。自分を正義の立場において人を非難するなら、共感反感の差はあれ、主張そのものは伝わるだろう。しかし、彼はいつの頃からか、自分に正義があるものとしては何事も発想しなくなつてしまつていた。そこに秘められた悲哀と憤怒がなくてはならないにせよ、そういう立場が存在するということ自体、彼に思い遣りをかけてくれるこの婦人にも通じはしないのだ。そして勢いの赴くところ、展示物を見学に来た外国の賓客を案内して食事をともし、昼日中から酔つぱらつてしまつた同僚の失態を自分のことに仕立てた諧謔にまで及んだ時、矢野駒の表情から物柔らかさが退いて消えた。

小さな朱塗りの食饌が膝下に据えられ、食慾をそそらぬ天ぷらと吸物が並べられた。時計がそのとき十一時を打つた。下宿人にとってそれは門限を意味する。

無駄に流れてゆく時間を時枝は思い、そしてひそかにそれを哀惜する。

かつては時枝にも成し遂げたいと思う理想はあり、日々の苦痛がその目標との照応関係で意義付けられるように思えた心の中の鏡もあつたのだ。心の中の鏡は、この世の悲惨や矛盾を映すにせよ、自己の欠陥を照し出すにせよ、それが現に立っている場所よりも前に掛つてゐるかぎり意味がある。まどわしい人間関係も、それが自らの能力を試す試練であり、価値的な素材であると感ぜられた時代——。だが今は彼は可能な限り人間関係から遠ざかり、ただ古く悲しげな仏像や磁器、すでに色褪せ、やがては滅びゆく巻物や掛軸とのみかかわらうとしている。それもそれら対象の、それぞれの時代に

生臭く呼びかけた人間の喜怒哀楽の表現としてではなく、香のかおりがひととき部屋に心なごむ気配を漂わして消え、やがて滅びるゆえに哀惜する、そういう美として。かつては彫刻師がその良心と信仰心を鑿（ひ）の一ほり一ほりにこめた木像が、木目もあらわに古び、虫喰って、原型を失ってゆくその哀れさを彼は愛しているようなものだった。人間が彫り刻み爪あとを残したことから、人間臭さが消えてゆく過程、彼の衰弱した精神が対話するにはそれこそがふさわしい。

勝手口の戸が、人が肩ごとぶつつかるように鳴り、時枝は確かに笛の音のように悲しげな人声を聞いたように思った。

「誰か来たんじゃないですか」時枝は自分が箸をもったまま起きあがった。彼の頭にふれて電球が暗様にゆれる。

「変におびえて、どうしたの」矢野駒の顔もそのときすでに二重に映っていた。障子の棧は汚れた魂の襲のように歪んでみえた。不吉な予感、しかしただ時枝の悪酔いにしびれた神経のわざにすぎなかった。

「なにか郵便屋でもきたのかと思った」

「おかしな人ね。こんな夜おそく配達人がくるはずはないでしょ。それともなにか気にかかることがおありなの」

「いや、そうじゃなくて、本当は……」

時枝はその時、ある人が棺に入れられてこの家に運び込まれる妄想にとらわれていたのだ。なぜ不意にそんな陰惨な空想にとらわれたのだろうか。

たとえ時枝が恐れていることが事実となり、その女性が死んだとしても、その遺骸が彼の下宿先に